

## 翻訳：

シャイフ・トゥースィー著

『深夜礼拝する者の灯火 (*Miṣbāḥ al-Mutahajjid*)』より

「アーシューラーの参詣祈願 (*Ziyāra ‘Āshūrā*)」翻訳・注解

Translation with Annotations of “*Ziyāra ‘Āshūrā*” from al-Shaykh al-Ṭūsī’s *Miṣbāḥ al-Mutahajjid*

平野 貴大

Takahiro HIRANO

### I. はじめに

十二イマーム派（以下、シーア派）とは預言者ムハンマドの後継者たる 12 人のイマームを信奉する宗派である。シーア派信徒にとってイマームたちの廟への参詣は重要な信仰儀礼の 1 つであり、とりわけ「殉教者たちの長 (*sayyid al-shuhadā*)」とも呼ばれる 3 代目イマーム・フサインの廟は参詣地として有名である。本稿は、フサインの追悼儀礼の際に全シーア派地域で広く詠まれてきた「アーシューラーの参詣祈願 (*ziyāra ‘Āshūrā*)」の翻訳である。アーシューラーとはムハッラム月（ヒジュラ暦第 1 月）の 10 日を指す。ヒジュラ暦 61 年／西暦 680 年のアーシューラーにフサインがウマイヤ朝軍によってカルバラー（現イラク）で惨殺され、この出来事はシーア派が政治党派から宗教宗派へと変化するきっかけとなった（菊地 2009, 69–73）。シーア派信徒は毎年ムハッラム月の最初の 10 日間、とりわけアーシューラーにフサインの追悼儀礼を行ってきたが、その中に「アーシューラーの参詣祈願」を詠むことが含まれている。

「アーシューラーの参詣祈願」はイブン・クーラワイヒ (*Ja‘far ibn Muḥammad ibn Qūlawayh*, d. 368/978–79) の『参詣の完成 (*Kāmil al-Ziyārāt*)』に、次いでシャイフ・トゥースィー (*Shaykh al-Ṭā‘ifa al-Ṭūsī*, d. 460/1066–67) の『深夜礼拝する者の灯火 (*Miṣbāḥ al-Mutahajjid*)』に収録されている (al-Kāshānī 2003–04, 28–29)。おそらくイブン・クーラワイヒの著作が同祈願を収録する現存する最古の文献である。イブン・クーラワイヒとトゥースィーはいずれもシーア派 5 代目イマーム・バーキルに帰される伝承という形で本参詣祈願を伝えているが、両者が伝える伝承はそれぞれ伝承経路が異なり本文にも異なる部分がある (Ibn Qūlawayh n.d., 325; al-Ṭūsī 1998, 536)。

イブン・クーラワイヒはシーア派ハディース 4 書の中で最も権威の高い『充全の書 (*Kitāb al-Kāfi*)』を編纂したクライニー (*Muḥammad ibn Ya‘qūb al-Kulaynī*, d. 329/941) の弟子であり、10 世紀の伝承主義的潮流の学者の 1 人である。また、イブン・クーラワイヒは 11 世紀におけるシー

ア派の合理主義的潮流の創始者とも言えるシャイフ・ムフィード (al-Shaykh al-Mufid Muḥammad ibn Muḥammad ibn al-Nu‘mān, d. 413/1022) の師の1人であり、「アーシューラーの参詣祈願」のもう1人の伝承者トゥースィーはムフィードの弟子である<sup>1)</sup>。そのため、イブン・クーラワイヒにとってトゥースィーは孫弟子に当たる。

イブン・クーラワイヒとトゥースィーの収録するいずれの伝承もハディース学上大きな問題を抱えている。両伝承ともハディースの伝承経路 (isnād) に記されている伝承者の中に極端派 (ghulāt, 預言者やイマームを神格化するような集団) やワーキフ派 (Wāqifa, 特定のイマームの代でイマーム位が停止したと主張する集団) を信奉していた可能性のある人物、また、信頼できるとは判断できないような人物を含む。そのため、「アーシューラーの参詣祈願」は宗教儀礼の中で積極的に用いられてきたものの、ハディース学上はその信頼性が「薄弱 (da‘īf)」であると判断されることになる (al-Kāshānī 2003–04, 73)。ハディース学において「薄弱」と判定された伝承が積極的に受け入れられることは非常に稀ではあるが、同様のことはシーア派では初代イマーム・アリーに帰される説教集『雄弁の道 (Nahj al-Balāgha)』、4代目イマーム・ザイヌルアービディーンに帰される『サッジャードの書 (al-Sahīfa al-Sajjādiyya)』にも当てはまる。その内容が広く知られていたこと、また、その内容がイマームから発せられたとしか考えられないほど精緻なものであると見なされたことなどが理由となり、これらのイマームに帰される文献は、ハディース学上の伝承経路の精査を行う必要すらなく「真正」であるとシーア派では判断されている (平野 2021, 29–30)。このように、ハディース学上の例外のような位置付けにある「アーシューラーの参詣祈願」を翻訳し注解することはイスラーム思想研究の観点でも一定の意味があるだろう。

また、シーア派の中には、5代目イマーム・バーキルが語った「アーシューラーの参詣祈願」の文言はバーキルが自身自身で創作したものではなく、神が伝えた「神聖ハディース (ḥadīth qudsī)」であると主張する学者もいる。イスラームにおいて、「神聖ハディース」はクルアーン同様に神に由来するとされる。しかしながら、クルアーンが神の言葉そのものであると信じられているのに対して、神聖ハディースはその内容が神由来であっても、その言語上の表現は預言者 (シーア派では、イマームたちも含む) に由来するようなハディースとされる (‘Abbās 2010, 102–105)。神聖ハディースのスナナ派の中の位置付けに関する研究は少なくないものの、シーア派の中での位置付けは Viložny (2019) を除けばほとんどない。このような観点でも、「アーシューラーの参詣祈願」は今後のシーア派ハディース研究において重要な資料の1つになり得る。

「アーシューラーの参詣祈願」の内容は主に、(1) フサイン、および、彼とともにカルバラーで惨殺された人々への来世における祝福祈願、(2) シーア派のいわゆる十行の1つである預

---

<sup>1)</sup> シーア派思想史は10世紀末から11世紀初頭にかけて大きな転換点を迎えた。10世紀末までのシーア派では預言者とイマームたちに帰される伝承の字義に拘泥する伝承主義的潮流が支配的であったのに対して、シャイフ・ムフィードの登場以降、伝承のみならず知性的推論にも重きを置く合理主義的潮流が同派の主流派となった。これについては、拙論 (2018, 107–108) を参照されたい。

言者ムハンマドとイマームたちに対する忠誠 (*tawallī*) の意思表示, 及び, (3) 十行の 1 つであるイマームの敵に対する絶縁 (*tabarrī*), の 3 つに分けることができよう。これらはいずれもシーア派信徒にとって重要な事柄であり, 同派の自己認識と敵対的な他派像を映し出すものでもあるだろう。同参詣祈願はシーア派の自他認識を分析する上でも重要なテキストの 1 つであるものの, カルバラの事件の時代背景やシーア派が用いる隠語を踏まえていなければ, その意味が十分には理解されないものである。

そのため, 本稿は同参詣祈願を単に翻訳するのみではなく, 注釈書や先行研究をもとに本文の 2 倍に近い分量の注を付けて解説した。「アーシューラーの参詣祈願」はアラビア語の原典から複数の言語によって翻訳されてきた。本稿の訳文を作成するにあたっては, Sayyid Athar Husain & S. H. Rizvi の英訳, および, *Mo'assase-ye Šabā* という機関によるペルシア語訳を参照した。また, トゥースィー版とイブン・クーラワイヒ版のテキストを比較すると, トゥースィー版の方が少しだけ分量が多く正統カリフやウマイヤ家への示唆的表現に含んでおり, 翻訳することで得られる知見は大きいように思われる。そのため, テキストはイブン・クーラワイヒの伝承ではなく, トゥースィーの伝承を採用した。底本としては *Shaykh al-Ṭā'ifa al-Ṭūsī, Mišbāh al-Mutahajid, Beirut: Mu'assasa al-A'lā, 1418 [1998]* を採用した。両伝承者のテキストの相違点の全てを列挙したわけではないが, 訳文の意味が大きく変わり得る異同がある場合には注でイブン・クーラワイヒ版も追記している。なお, トゥースィー版の底本には改行がほとんどないため, 本稿では内容の切れ目ごとに訳者が改行している。

## II. 翻訳

あなたに平安がありますように, アブー・アブドゥッラー<sup>2)</sup>よ。あなたに平安がありますように, アッラーの使徒の息子よ<sup>3)</sup>。あなたに平安がありますように, 信徒たちの長 (*amīr al-mu'nimīn*)<sup>4)</sup>の息子, 遺言執行人たちの長 (*sayyid al-waṣīyīn*) の息子よ。あなたに平安がありますように, 諸世界の女性たちの長であるファーティマの息子よ。あなたに平安がありますように, アッラーの血の復讐者 (*thār Allāh*)<sup>5)</sup>と彼の血の復讐者の息子, 唯一の単独なる御方 (*al-witr*

<sup>2)</sup> アラブ人の呼称にはイスマ (*ism*) とクンヤ (*kunya*) とラカブ (*laqab*) がある。フサインを例にとれば, 彼のイスマはフサイン・イブン・アリーであり, 彼のクンヤはアブー・アブドゥッラーであり, 彼のラカブは「殉教者たちの長 (*Sayyid al-Shuhadā'*)」である (Momen 1985, 28)。

<sup>3)</sup> イブン・クーラワイヒの伝承ではこの次に「神の選びし者 (*khiyara*) であり彼の選びし者の息子よ, あなたに平安がありますように」という言葉があるが, トゥースィー版にはない (*Ibn Qūlawayh n.d., 328; al-Ṭūsī 1998, 537*)。

<sup>4)</sup> スンナ派第 4 代正統カリフにして, シーア派初代イマームであるアリーの尊称。

<sup>5)</sup> ここでの *thār* とは *thā'ir* のハムザ (◌) が省略されたものと解釈され, 多くの写本・刊本では *thār* という表記が採用されている。*Thār* の字義は「血の復讐を求めること (*ṭalab al-dam*)」であるが, 本文での表現に関しては様々な解釈が存在する。一説によれば, これは再来 (*raj'a*) の時にフサインが殉教者たちの血の復讐を行うことを意味するという (*al-Kāshānī 2003-04, 44*)。シーア派においては, 「再来 (*raj'a*)」と「復活の日 (*yawm al-qiyāma*)」は別のものとして理解されている。復活の日は現世が終わり, アッラーが人間全員を復活させ, 楽園と火獄に振り分ける最後の審判の日である。そ

al-mawtūr)<sup>6)</sup>よ。あなたとあなたの中庭に留まる霊 (al-arwāḥ allatī ḥallat bi-finā'i-ka)<sup>7)</sup>に平安がありますように。私が生き、夜と昼があり続ける限り、私からあなたがた全員にアッラーの平安が永遠にありますように。

アブー・アブドゥッラーよ、惨害は甚大で大きく ('aẓumat al-raẓīya wa-jallat), あなたを襲った惨事は我々と全イスラームの民にとって (muṣība bi-ka 'alay-nā wa-jamī' ahl al-Islām) 甚大で、あなたへの惨事は諸天において諸天の民全員にとって甚大でした<sup>8)</sup>。そのため、あなたがたの家の人々 (ahl al-bayt) に対する不正 (ẓulm) と不義 (jawr) の基礎を打ち立てた集団 (umma) をアッラーが呪い給いますように<sup>9)</sup>。そして、あなたがたをあなたがた [のあるべき] 地位 (maqām) から追いやり、アッラーがあなたがたに作り給うた階級からあなたがたを排除した (azālat-kum 'an marātibī-kum allatī rattaba-kum Allāh fi-hā) 集団をアッラーが呪い給いますように<sup>10)</sup>。そして、あなたがたを殺害した集団をアッラーが呪い給いますように。そして、彼らのためにあなたがたとの戦闘を強固に準備した者たち (al-mumahhidīn la-hum bi-al-tamkīn min qitāli-kum) をアッラーが呪い給いますように。私はアッラーとあなたがたとともに (ilā Allāh wa-ilay-kum)<sup>11)</sup>彼らと彼らの党派、彼らの従者、彼らの友から絶縁しました<sup>12)</sup>。

アブー・アブドゥッラーよ、復活の日まで私はあなたがたと和平を結ぶ者たちには和平

れに対して「再来」は現世での出来事であり、復活の日よりも前にイマームたち、とりわけフサインと彼の敵たちが現世に再来して、フサインが自分自身と仲間たちの復讐を果たすことである (Amir-Moezzi 2011, 406-408; Daftary 2013, 38)。

<sup>6)</sup> al-witr は thāra Allāh 同様に呼び掛けの yā' にかかるため対格をとる。シーア派の通説では、ここでの witr は「単独なる者 (fard)」の意味であり、彼の時代に完成の域にいたのは彼 1 人だったからと解釈される。また、ここでの mawtūr は witr の強調のために用いられている (al-Kāshānī 2003-04, 46)。

<sup>7)</sup> 注釈者カラーンタリー (Kalāntarī) によれば, ḥalla は「(その場所に) 泊まる, 滞在する (nazala)」の意味になる。finā' は一般的には「家の中庭」などを意味する単語であり、ここでの「霊」とはフサインとともに殉教した人々の霊を指すという。ここでは, finā' はフサインの廟を暗示し, 戦死者たちの霊がフサインの廟の範囲内で眠っていることを示唆するという (Kalāntarī 2008, 100-102)。また, この箇所はイブン・クーラワイヒ版では「あなたの中庭に泊まり, あなたの鞍に留まる者たちの霊 (al-arwāḥ allatī ḥallat bi-finā'i-ka wa-anākhat bi-raḥli-ka) という文言で伝えられているが, トゥーサー版では「あなたの鞍に留まる」という文言はない (Ibn Qūlawayh n.d., 328; al-Ṭūsī 1998, 537)。

<sup>8)</sup> イブン・クーラワイヒ版では「あなたを襲った惨事 (muṣība bi-ka) は我々と諸天の民 (ahl al-samāwāt) たちにとって甚大でした」だけとなっている (Ibn Qūlawayh n.d., 328)。

<sup>9)</sup> 「呪う」と訳したアラビア語の単語は la'ana である。「神から呪詛すること (la'ana min Allāh)」とは「(神に) 近い関係と神の慈悲から追いやること (al-ṭard min maqām al-qurb wa-al-raḥma al-ilāhiya)」の意味であるという (Kalāntarī 2008, 123)。

<sup>10)</sup> ここでの地位や階級とは, イマームたちの持つ神への精神的な近さやイマーム位の権利のことでなく, 現実世界におけるカリフ位を指すと解釈される (al-Kāshānī 2003-04, 59)。

<sup>11)</sup> 前置詞 ilā は, 時間的・空間的に「～まで」と訳するのが一般的である。しかし, ここでは「アッラーとあなたがたまで」という訳では意味が明瞭ではない。そこで, この箇所ではクルアーンの「アッラーとともに私の援助者は誰か (man anṣarī ilā Allāh)」(3:52) 中の ilā の用法を採用した。クルアーンのこの箇所の ilā は「～とともに (ma'a)」の意味で解釈されることがある (al-Ṭabarī 1994, vol. 2, 263)。

<sup>12)</sup> イブン・クーラワイヒ版では「私はアッラーとあなたがたとともに彼らと彼らの党派, 彼らの従者, 彼らの友から遠ざかります」という文言はない。

(silm) であり<sup>13)</sup>、あなたがたと戦争する者たちには戦争であります (ḥarb)。ズィヤードの一族 (āl Ziyād)<sup>14)</sup>とマルワーンの一族 (āl Marwān)<sup>15)</sup>をアッラーが呪い給いますように。そして、ウマイヤ家全員をアッラーが呪い給いますように。そして、アッラーがイブン・マルジャーナ (Ibn Marjān, d. 67/686–87)<sup>16)</sup>を呪い給いますように。そして、アッラーがウマル・イブン・サアド (‘Umar ibn Sa‘d, d. 66/ 685–86)<sup>17)</sup>を呪い給いますように、アッラーがシムル (Shimr, d. 66/685–86)<sup>18)</sup>を呪い給いますように。彼 (フサインのこと) との戦闘のために [軍馬に] 鞍をつけ (asrajat), 手綱を引き (aljamat), 覆いを付けた (tanaqqabat)<sup>19)</sup>集団をアッラーが呪い給いますように。

あなたは私の父と母のようです (bi-abī anta wa-ummī, 敬意を示す表現)<sup>20)</sup>、私の被るあなたを襲った苦難 (muṣībī bi-ka) は甚大なものです<sup>21)</sup>。そのため、あなたの地位を高貴にされ、あなた

<sup>13)</sup> 「私は和平 (silm) である」という表現は、クルアーンの2章208節「信仰する者たちよ、完全に和平 (silm) に入り、悪魔の歩みに従ってはならない。まことに彼はおまえたちにとって明白な敵である」という文言に由来する。シーア派の伝承によれば、ここでの「和平」の意味について質問された6代目イマーム・サーディクは「アリーと彼の後の遺言執行人たるイマームたちへの忠誠 (walāya) である。悪魔の歩みとはアッラーに誓って某と某への忠誠 (walāya) である」と言ったという (al-Kāshānī 2003–04, 64)。なお、本稿でのクルアーンの翻訳は中田考 (2014) に準拠したが、本稿の記述に合わせて一部を変更している。

<sup>14)</sup> ズィヤード (Ziyād, d. 53/673) は「彼の父の息子ズィヤード (Ziyād ibn Abī-hi)」とも呼ばれており、彼の父の名前については諸説ある。彼はウマイヤ家の人物であり、本文のこの箇所のすぐ後に来る「イブン・マルジャーナ」ことウバイドゥッラーの父である (al-Kalāntarī 2008, 139)。

<sup>15)</sup> マルワーン・イブン・ハカム (Marwān ibn al-Hakam, d. 65/685) はウマイヤ朝の4代目のカリフである。彼の父ハカムは第3代正統カリフ・ウスマーンの叔父である。シーア派伝承集には預言者やイマームたちがマルワーンを非難する言葉が少なからず収録されている (al-Kalāntarī 2008, 143–144)。

<sup>16)</sup> イブン・マルジャーナとは当時のイラクの総督ウバイドゥッラー・イブン・ズィヤード (‘Ubayd Allāh ibn Ziyād, d. 67/686) のことであり、彼は前述のズィヤードの息子である。フサイン殺害のために兵を配備した人物であり、シーア派の伝承では6万人以上の兵を集めたとも言われる (al-Kalāntarī 2008, 156–157)。

<sup>17)</sup> 彼の父サアド・イブン・アビー・ワッカース (Sa‘d ibn Abī al-Waqqās) は教友の一人で、3代目の正統カリフを選出するための合議に参加し、アリーではなくウスマーンの擁立に関与した人物である。ウマル・イブン・サアドはカルバラーにおけるウマイヤ朝軍の司令官であった (Momen 1985, 29–30)。

<sup>18)</sup> シムル・イブン・ズィルジャウシャーン (Shimr ibn Dhī al-Jawshan) はスィッフイーーンの戦いの際にはアリー陣営に加わっていたが、カルバラーの事件ではウマイヤ朝軍に加わりフサインと対峙した。一説ではシムルがフサイン殺害の実行者で、彼がフサインの首を切り落としたと言われる (al-Maqqarram 2012, 208; Aghaie 2004, 9; Hyder 2006, 27)。

<sup>19)</sup> イブン・クーラワイヒ版では「覆いを付けた」ではなく、「準備した (tahayya’at)」となっている (Ibn Qūlawayh n.d., 329)。

<sup>20)</sup> イブン・クーラワイヒ版ではこの一文の前に「アブー・アブドゥッラーよ」というフサインへの呼びかけの言葉が入っている (Ibn Qūlawayh n.d., 329)。

<sup>21)</sup> 「私の被るあなたを襲った苦難 (muṣībī bi-ka)」は注釈者フィールーズクーヒーの説明をもとに訳出した。彼のこの箇所を言及した上で、既出の「あなたを襲った惨事は我々にとって (muṣība bi-ka ‘alay-nā)」の意味を、「我々はあなたの惨事を被っている (nahnu muṣābūna bi-muṣībati-ka)」(後略)と説明する。ここでの前置詞 bi は他動詞化する際の目的語を示す用法であるという (al-Firūzkūhī 2009, 106–107, 109–111, 116)。この解釈に基づき、テキスト内の muṣībī bi-ka という言葉を「あなたの受けた惨事を私も被っている」という含意があると判断して翻訳した。

によって (bi-ka) <sup>22</sup>私をも高貴になし給うたアッラーに私はお願い致します, 家の人々<sup>23</sup>——アッラーが彼と彼の家族を祝福し給いますように——の中の「援助されるイマーム (imām maṣūūr) <sup>24</sup>とともにあなたの復讐の求め (ṭalab ṭhāri-ka) <sup>25</sup>を私に下さるようにと。アッラーよ, 私をあなたの御許でフサイン——彼に平安あれ——によって現世でも来世でも高位者 (wajīh) にしてください。

アブー・アブドゥッラーよ<sup>26</sup>, 私はアッラー, 彼の使徒, 信徒たちの長 (amīr al-mu'minīn, アリーのこと), ファーティマ, ハサン, そしてあなた<sup>27</sup>に近づきます, あなたへの忠誠 (muwālāt-ka) によって, また, あなたと戦った者とあなたに戦争を仕掛けた者たちと絶縁すること (barā'a) によって, また, あなたがたとあなたがたの党派に対しての圧政 (zulm) と不正 (jawr) の基礎を作った者たちと絶縁することによって。私はアッラーと彼の使徒とともに, その [圧政と不正の] 基礎を作り, その上に建物を立て, あなたとあなたの党派に対する圧政と不正を実行した者と絶縁します<sup>28</sup>。私はアッラーとあなたがたとともに彼らと絶縁し (barī'tu ilā Allāh wa-ilay-kum min-hum), アッラーに, それから, あなたがたに私は近づきます, あなたがたへの友好 (muwālāt) とあなたがたの友への友好 (mawālāt walī-kum) によって<sup>29</sup>, また, あなたがたの敵たちとあなたがたに戦争を仕掛ける者たち (al-nāṣibīn la-kum al-harb) から絶縁することによって, 彼らの党派と彼らの従者との絶縁によって。実に私はあなたがたと平和を結ぶ者たちには和平 (silm) であり, あなたがたと戦争する者たちに対する戦争 (ḥarb) であり, あなたがたを敬愛する者 (man wālā-kum) の友であり, あなたがたに敵対する者 (man 'ādā-kum) の敵です。

<sup>22</sup> 「あなたによって」とは, 「あなたを認知することによって (bi-ma'rifati-ka)」、「あなたへの愛によって (bi-mahabati-ka)」、「あなたを真と見なすことによって (bi-taṣḍīqi-ka)」などの意味で解釈される (al-Kāshānī 2003-04, 73)。

<sup>23</sup> トゥーサー版では ahl al-bayt だが, イブン・クーラワイヒ版では āl Muḥammad となっている。

<sup>24</sup> 後の十二イマーム派の解釈では, ここでの「援助されるイマーム」とは 12 代目イマームを指すとされる。イマームが再臨する頃には, カルバラーの事件以降に参詣祈願を唱えてきた信徒の大半は時間の経過によって死んでいるだろう。ここでの復讐の機会とは前述の「再来 (raj'a)」のことであるとされる。現世においてメシアたる 12 代目イマームが再臨する時, シーア派信徒の一部もともに復活し, イマームはその復活した従者と天使たちによって援助されると信じられている (al-Kāshānī 2003-04, 73-74)。

<sup>25</sup> 幾つかの写本では「あなたの復讐の求め (ṭalab ṭhāri-ka)」となっているが, 注釈者フィールーズクーヒーによれば「求め (ṭalab)」がない写本もあり, 前者は誤りで後者が正しいという (al-Firūzkūhī 2009, 114)。

<sup>26</sup> イブン・クーラワイヒ版では, 「我が長よ (yā sayyidī), アブー・アブドゥッラーよ」となっている (Ibn Qūlawayh n.d., 329)。

<sup>27</sup> イブン・クーラワイヒ版では彼らに対する祝福祈願の言葉「アッラーがあなたと彼らを祝福し給いますように」が挿入されている。

<sup>28</sup> シーア派の伝承に基づく解釈では, フサインに対する圧政の基礎を打ち立てた者とはフサインの殺害を指示したウマイヤ朝第 2 代カリフのヤズィード・イブン・ムアーウィヤを指す, とされる。また, 別の解釈では預言者の家族からカリフ位を篡奪した者たちを指すとされる (al-Kāshānī 2003-04, 81)。

<sup>29</sup> muwālāt は多義語であり, 「忠誠」, 「親愛」, 「友好」などの意味があり, 訳文では文脈によって訳語を変えている。

そして、あなたがたを認知し、あなたがたの友を認知すること (ma'rifa) によって私を高貴にし給い (akrama-nī), 私をあなたがたの敵たちから絶縁させてくださったアッラーにお願い致します, 現世でも来世でも私をあなたがたとともにいるようにしてくださるようにと, また, 現世でも来世でもあなたがたの許で私に真の足場<sup>30)</sup>を固めてくださるようにと (yuthabbita li 'inda-kum qadam šidq fi al-dunyā wa-al-ākhirā). また, 私は彼 (アッラー) にお願い致します, アッラーの許であなたがたが持つような賞賛される地位に私を到達させてくださるようにと, また, あなたがたの中での導かれ顕在し真理を語るイマーム (imām mahdī zāhir nātiq bi-al-ḥaqq min-kum)<sup>31)</sup>とともにあなたがたの復讐の求め (ṭalab thāri-kum) を私に下さりますようにと. また, あなたがたの権利 (bi-ḥaqqi-kum)<sup>32)</sup>によって, また, 彼の御許でのあなたがたの地位 (al-sha'n) によって私はアッラーにお願い致します, 私の被るあなたがたを襲った苦難 (muṣābī bi-kum) によって [現世で] 苦難を受けた者たちに与え給うもので最も功德あるもの (afdāl) を私にお与えくださるようにと<sup>33)</sup>. なんとという災難でしょう (yā lahā min muṣība). イスラームと天と地の民全員において, これがなんとという重大なことか, この惨害たるやなんと甚大なことでしょうか (mā a'zama-hā wa-a'zama razīyata-hā fi al-Islām wa-fi jamī' ahl al-samāwāt wa-al-ard). アッラーよ, 私がいるこの場所であなたからの祝福と慈悲と赦しが到達する者の 1 人に私をしてください. アッラーよ, 私の生命をムハンマドとムハンマドの家族の生命にしてください, 私の死をムハンマドとムハンマドの家族——アッラーが彼と彼の家族を祝福し平安をもたらしますように——の死にしてください (uj'al mahyāya mahyā Muḥammad wa-āl Muḥammad wa-mamānī mamāt Muḥammad wa-

<sup>30)</sup> 「真の足場 (qadam šidq)」とはクルアーン 10 章 2 節「人々に警告せよ, そして信仰する者たちには, 彼らの主の御許に真の足場があるとの吉報を伝えよ」に由来する。スンナ派のクルアーン注釈者であるタバリー (Muḥammad ibn Jarīr al-Ṭabarī, d. 923) によれば, 「真の足場」の解釈については見解の対立がある。タバリーは「先行して行った善行による良い報酬がある」, 「護持された書板において幸福に関する真実の先行がある (la-hum sābiq šidq fi al-lawḥ al-mahfūz min al-sa'āda)」などの解釈を例示する (al-Ṭabarī 1994, vol. 4, 184)。

<sup>31)</sup> 「現れし御方 (zāhir)」とは「隠されし御方 (mastūr)」の反対であり (al-Kāshānī 2003-04, 85), シーア派の解釈では, この箇所は姿を顕す際のメシアとしての 12 代目イマームを指すとされる。シーア派では 12 代目イマームは 874 年から信徒の前から姿を隠す幽隠 (ghayba) の状態にあるとされるが, 彼はメシアとして地上に再臨し, 地上を正義で満たすと信じられている。なお, この箇所はイブン・クーラワイヒ版では「導かれし御方, あなたがたのために語るイマーム (imām mahdī nātiq la-kum)」となっている (Ibn Qūlawayh n.d., 330)。

<sup>32)</sup> 預言者とイマームたちの権利によって祈願するという考え方はシーア派のハディースの中では多く言及される。注釈者カーシャーニー (Āyat Allāh al-'Uzmā Ḥabīb Allāh al-Kāshānī, d. 1901-02) はマジュリスイーの『諸光の大海 (Bihār al-Anwār)』に収録される「ムハンマドとムハンマドの家族に祝福を祈願しなさい。威力あり尊厳高きアッラーはムハンマドに言及した時 ('inda dhikr Muḥammad) にお前たちのドゥアーを受け入れ給う」というアリーの言葉を例に挙げている (al-Kāshānī 2003-04, 85; al-Majlisī 1983, vol. 10, 92)。

<sup>33)</sup> トゥースィー版にはないが, イブン・クーラワイヒ版ではこの文の後に「私は『我らはアッラーのもの, 彼の御許へ帰りゆく (innā li-Allāh wa-innā ilay-hi rāji'ūn)』と言います」という文言が挿入されている (Ibn Qūlawayh n.d., 330)。この言葉は誰かが亡くなった時にムスリムが唱える言葉であり, クルアーン 2 章 156 節「苦難が襲うと (idhā aṣābat-hum muṣība) 『我らはアッラーのもの, 彼の御許へ帰りゆく』という者たちである」に由来する。

āl Muḥammad) <sup>34)</sup>。

アッラーよ、今日こそ、ウマイヤ家、および、肝臓を食う女の息子 (ibn ākila al-akbād) <sup>35)</sup>、つまり、「呪詛された者の息子である呪詛された者 (al-la‘īn ibn al-la‘īn)」——あなたの預言者が滞在したあらゆる地や場所においてあなたの舌とあなたの預言者——アッラーが彼と彼の家族を祝福し給いますように——の舌によって [呪詛された者である] ——<sup>36)</sup>が祝った日 (yawm tabarrakat bi-hi) です<sup>37)</sup>。アッラーよ。アブー・スフヤーン<sup>38)</sup>とムアーウィヤとヤズィード・イブン・ムアーウィヤを呪い給え。彼らにあなたから永劫の呪詛がありますように (‘alayhim min-ka al-la‘na abada al-ābidīn)。実に今日こそズィヤードの一族とマルワーンの一族が歓喜した日です (yawm farihat bi-hi) <sup>39)</sup>。彼らに呪詛がありますように、彼らがフサイン——彼にアッラーの祝福あれ——を殺害したことによって。アッラーよ、彼らに対する呪詛と痛ましい懲罰を何倍にもしてください<sup>40)</sup>。アッラーよ、今日、この場所で、また、私の生きる日々において (ayyām ḥayātī) 私はあなたに近づきます、彼らと絶縁し彼らを呪詛することで、また、あなたの預言者とあなたの預言者の家族——彼と彼らに平安あれ——に忠誠を示すことによって。

<sup>34)</sup> この箇所にも幾つかの解釈があるが、「私の生命 (死) を～の生命 (死) のようにしてください」と比喩的に解釈されることがある (al-Kāshānī 2003-04, 91)。

<sup>35)</sup> これはウマイヤ朝初代カリフ・ムアーウィヤの母ヒンド (Hind bint ‘Utba) を指すとされる。彼女がこのように呼ばれる理由は、ヒンドが預言者のおじハムザの遺体の肝臓を食らったというムスリム世界の伝承にちなむという。彼女の息子であるムアーウィヤはフサインの殺害時にはすでに死去していたため、ここでの「肝臓を食う女の息子」とはムアーウィヤのことではなく、彼の息子のヤズィードを指すという (al-Kāshānī 2003-04, 94-95)。

<sup>36)</sup> 預言者の舌によって「呪詛された者の息子である呪詛された者」の最初の「呪詛された者」とはムアーウィヤないし彼の父アブー・スフヤーンを指し、後者の「呪詛された者」とはヤズィードを指す (al-Kāshānī 2003-04, 95)。つまり、「呪詛された者の息子である呪詛された者」とはムアーウィヤの息子 (アブー・スフヤーンの子孫) であるヤズィードの意味で解釈される。

<sup>37)</sup> この一文はイブン・クーラワイヒ版では「アッラーよ、この日こそ、ズィヤードの家族とウマイヤ家 (āl Umayya)、肝臓を食う女の息子 (ibn ākila al-akbād)、あなたの預言者が滞在したあらゆる地や場所においてあなたの預言者の舌によって「呪詛された者の息子である呪詛された者 (al-la‘īn b. al-la‘īn)」に対する呪詛が下った日です」となっている。文意はそれほど変わらないが、トゥースィー版では今日であるアッシューラーの日はフサインの敵たちが喜ぶ日であるとされるが、イブン・クーラワイヒ版では彼らに呪いがかけられる日とされる (Ibn Qūlawayh n.d., 331)。

<sup>38)</sup> 以前の注ですでに述べたように、アブー・スフヤーンとはムアーウィヤの父であり、ヤズィードの祖父にあたる。

<sup>39)</sup> イブン・クーラワイヒ版とトゥースィー版では文言に大きな異同がある。イブン・クーラワイヒ版では「アッラーよ、実にこの日はズィヤードの家族とマルワーンが歓喜した日です (yawm farihat bi-hi)。彼らがフサイン——彼にアッラーの祝福あれ——を殺害したことによって彼らに呪詛がありますように」という一文がない (Ibn Qūlawayh n.d., 331)。

<sup>40)</sup> イブン・クーラワイヒ版では「彼らがフサインを殺害したことゆえに、彼らに対する呪詛を永遠に何倍にもしてください (fa-dā‘if ‘alay-him al-la‘n abadan li-qatli-him al-Ḥusayn)」となっている (Ibn Qūlawayh n.d., 331)。シーア派の伝承では預言者ムハンマドが「火獄には、フサイン・イブン・アリーとヤフヤー・イブン・ザカリーヤの殺害による以外は人々の誰もそこに値しないような段階がある」と言ったと伝えられている。ヤフヤーは預言者イーサー (イエス) と同時代の預言者であり、彼はユダヤ教徒によって殺害されたとされる。この伝承ではヤフヤーとフサインの殺害者にだけ火獄の中でも厳しい懲罰が科されると解釈される (al-Kāshānī 2003-04, 100)。なお、フサインとヤフヤーの共通性を強調するシーア派学者もいる (‘Abbās al-Qummī 2011, vol. 1, 634)。



それから [次の言葉を] 言う<sup>41)</sup>。

アッラーよ、ムハンマドとムハンマドの家族の権利を侵害した最初の侵害者 (awwal zālim zalama ḥaqq Muḥammad wa-āl Muḥammad)<sup>42)</sup>、および、それによって彼に従った最後の者まで呪い給え。アッラーよ、フサインと戦い、彼を殺す [試みに] 追従し忠実に従った集団 (al-‘iṣāba allatī jāhadat al-Ḥusayn wa-tāba‘at wa-bāya‘at ‘alā qatli-hi)<sup>43)</sup>を呪い給え。アッラーよ、彼ら全員を呪い給え。

これを 100 回言う。それから (次の言葉を) 言う。

アブー・アブドゥッラーよ、あなたとあなたの中庭に留まる霊に平安がありますように。私が生き、昼と夜があり続ける限り永遠にアッラーの平安が私からあなたにありますように。アッラーがこれ (今回の参詣) を私があなたを参詣する最後の時 (ākhir al-‘ahd)<sup>44)</sup>にし給いませんように。フサインとアリー・イブン・フサイン (‘Alī ibn al-Ḥusayn)<sup>45)</sup>とフサインの仲間たちに平安がありますように。

これ (上記の言葉) を 100 回言う。それから [次の言葉を] 言う。

アッラーよ、最初の侵害者に私からの呪詛を特別に与えてください (khuṣṣa anta awwal zālim bi-al-la‘ni minnī)。まず (awwalan) 彼 (最初の侵奪者) から始めてください、それから第2の者 (al-

<sup>41)</sup> この箇所は「アーシューラーの参詣祈願」の本文の一部ではなく、イマーム・バーキルが詠み方を指示している言葉である (Ibn Qūlawayh n.d., 331)。これ以前の部分は 1 度詠めば良いが、これ以降は回数の指定や体勢の指定がある。

<sup>42)</sup> 注釈者カーシャーニーによれば、「最初の侵害者」とは「彼の遺言執行人 (waṣī-hu, 預言者ムハンマドの遺言執行人であるアリー) に先行し、彼の権利を篡奪し、カリフ位の衣をまとった (taqammaṣa al-khilāfa) 者」であるという (al-Kāshānī 2003-04, 102)。つまり、「最初の侵害者」とは初代正統カリフのアブー・バクルを暗示する表現である。

<sup>43)</sup> この箇所はイブン・クーライヒ版では「彼と彼の支援者たちを殺害するために、フサインと戦争し、彼の敵たちの側につき追従した者たち (al-‘iṣāba allatī ḥārabat al-Ḥusayn wa-shāya‘at wa-tāba‘at a‘dā’-hu ‘alā qatli-hi wa-qatli-anṣāri-hi)」となっている (Ibn Qūlawayh n.d., 331)。

<sup>44)</sup> ‘ahd は「約束」、「契約」、「期間」、「時間」、「信託」など様々な意味があるが、注釈者フィールーズクーヒーによれば、ここでの‘ahd は「時間 (waqt, zamān)」の意味で解釈されるという (al-Fīrūzkūhī 2009, 145-146)。

<sup>45)</sup> フサインの次の 4 代目イマームの名前はアリー・イブン・フサインであるが、本文のこの箇所における「アリー・イブン・フサイン」とは別の人物である。というのも 4 代目イマームはカルバラで殺害されることはなく、生き残ったからである。ここでフサインと彼の仲間たちと並べて言及される「アリー・イブン・フサイン」とは 4 代目イマームと同名の兄弟でカルバラにおいて殺害された「大アリー (‘Alī al-Akbar)」を指す (al-Kalāntarī 2008, 288; al-Fīrūzkūhī 2009, 147)。

thāmi) を、それから第3の者 (al-thālith) <sup>46)</sup>を、それから第4の者 (al-rābi‘) <sup>47)</sup>を。アッラーよ、5人目としてヤズィードを呪い給え、ウバイドゥッラー・イブン・ズィヤード、イブン・マルジャーナ、ウマル・イブン・サアド、シムル、アブー・スフヤーンの一族、ズィヤードの一族、マルワーンの一族を復活の日まで呪い給え。

それから跪拝（頭を地につける礼拝の1つ動作）をして、[次の言葉を] 言う。

彼らを襲った惨事について、あなたに感謝する者たちの賞賛によって賞賛はアッラーに属します (la-ka al-ḥamd ḥamda al-shākiriṅ la-ka ‘alā muṣibati-him)。私の甚大な惨害 (‘azīm razīyafī) において賞賛はアッラーに属します<sup>48)</sup>。アッラーよ、到達の日 (yawm al-wurūd) <sup>49)</sup>にフサイン——彼に平安あれ——による執り成し (shafā‘a) を私にお与えください。また、フサイン——彼に平安あれ——、および、フサインの前 (dūna) <sup>50)</sup>で己の命を犠牲にしたフサインの仲間たちとともに、あなたの御許で私に真実の足場 (qadam ṣidq) を固めてください。

<sup>46)</sup> この箇所は「第1の者」、「第2の者」、「第3の者」という隠語が用いられているが、これらはカリフ位就任の順番にアブー・バクル、ウマル、ウスマーンを指す隠語である (Bar-Asher 1999, 118)。シーア派の中にはタキーヤ (taqīya, 信仰隠し) という教義があり、生命や財産の危険を感じた場合に、個人の信条を隠すことが許される。本文のこの箇所の解釈をめぐることは、本参詣祈願の伝承者シャイフ・トゥースィー自身によるタキーヤに基づく次のような逸話が知られている。本書『深夜礼拝する者たちの灯火』の中の「アーシューラーの詣祈願」によってトゥースィーに教友を中傷しているという嫌疑がかけられたという。アッバース朝カリフがトゥースィーを召喚し審問すると、トゥースィーは教友たちへの中傷を否定し、次のように言ったという。「信仰者たちの長 (カリフに対する呼称) よ、意図するものは反対者たちが主張するようなものではありません。『第1の侵害者』とはハービール (アベル) の殺害者カービール (カイン) です、彼はアダムの子孫の中で殺害を始めた者です。『第2の者』で意図するものは預言者サーリフのラクダをかき切った者です、彼の名前はカイダール・イブン・サーリフ (Qaydār ibn Sālif) です。『第3の者』[で意図するもの] はヤフヤー・イブン・ザカリーヤ (前述のフサインに擬えられる人物で、預言者イエス) と同時代の預言者でユダヤ教徒に殺害された) の殺害者です。『第4の者』(で意図するもの) はアリー・イブン・アビー・ターリブの殺害者アブドゥッラフマーン・イブン・ムルジャムです」。トゥースィーのこの言葉を聞くとカリフは満足したという (al-Kāshānī 2003-04, 105-106)。

<sup>47)</sup> この箇所はムアーウィヤを指す (al-Kāshānī 2003-04, 105)。「第1の者」、「第2の者」、「第3の者」はカリフ位就任順であったが、4代目の正統カリフにはアリーが着任している。そのため、ここでの「第4の者」とはカリフ就任順での数え方ではなく、アリーのカリフを篡奪した順であり、ムアーウィヤを指すと考えられる。なお、イブン・クラーワイヒ版ではアブー・バクルからムアーウィヤまでの呪詛は明示的には書かれていない (Ibn Qūlawayh n.d., 332)。

<sup>48)</sup> イスラームでは、神への感謝と称賛はどのような状況でも求められるとされる。そのため、良い時も悪い時も「神に称賛は属す (al-ḥamd li-llāh)」という表現が用いられるという (Kalāntarī 2008, 305)。

<sup>49)</sup> これは「復活の日」のことである。「到達の日」という言葉の由来は、人々がアッラーの精算に到達すること、および、信仰者は溜池 (hawḍ, そこで預言者とアリーが待っている) に到達し、不信仰者は火獄に到達するからとされる (al-Kāshānī 2003-04, 107)。

<sup>50)</sup> ここでは「前で (amāma)」の意味に解釈される (Kalāntarī 2008, 308)。

## 参考文献

- ‘Abbās, Sayyid, *Ziyāra al-‘Āshūrā’ Tuḥfa min al-Samā’*: *Buḥūth Samāḥa Āyat Allāh al-Shaykh Muslim al-Dāwirī*, Qom: Mu’assasa Ṣaḥib al-Amr, 1431 [2010].
- al-Fīrūzkūhī, ‘Abd al-Rasūl, *Sharḥ Ziyāra ‘Āshūrā’*, Qom: Dār al-Ṣadiqa al-Shahīda, 1430 [2009].
- Ibn Qūlawayh, Ja‘far ibn Muḥammad, *Kāmil al-Ziyārāt*, Qom: Nashr al-Faqāha, n.d.
- al-Ṭūsī, Shaykh al-Ṭā’ifa, *Miṣbāḥ al-Mutahajjid*, Beirut: Mu’assasa al-A‘lā, 1418 [1998].
- al-Kalāntārī, Abu al-Faḍl, *Sharḥ Ziyāra ‘Āshūrā’*, Beirut: Mu’assasa al-Balāgha, 1429 [2008].
- al-Kāshānī, al-Mawlā Ḥabīb Allāh, *Sharḥ Ziyāra ‘Āshūrā’*, Qom: Dār Jalāl al-Dīn, 1424 [2003–04].
- al-Majlisī, Muḥammad Bāqir, *Biḥār al-Anwār*, 110 vols., Beirut: Dār Iḥyā’ al-Turāth al-‘Arabī, 1403 [1983].
- al-Muqarram, ‘Abd al-Razzāq, *Maqṭal al-Ḥusayn aw Ḥadīth al-Karbalā’*, Qom: Manshūrāt al-Sharīf al-Raḍī, 2012.
- Mo’assase-ye Ṣabā, *Ziyārat-e ‘Āshūrā’ va Do ‘ā’-e Tavassol*, Qom: Enteshārāt-e Etqān, 1394 [2015–16].
- al-Qummī, ‘Abbās, *Muntahā al-Āmāl fī Tawārīkh al-Nabī wal-al-Āl*, 2 vols., Beirut: Dār al-Muṣṭafā. al-‘Ālamīya, 1432 [2011].
- al-Ṭabarī, Muḥammad ibn Jarīr, *Tafsīr al-Ṭabarī min Jāmi‘ al-Bayān ‘an ta’wīl āy al-Qur’ān*, 10 vols., Beirut: Mu’assasa al-Risāla, 1994.
- Aghaine, K. S., *The Martyrs of Karbala: Shi‘i Symbols and Rituals in Modern Iran*, Seattle and London: University of Washington Press, 2004.
- Amir-Moezzi, M., *The Spirituality of Shi‘i Islam: Beliefs and Practices*, London and New York: I.B. Tauris Publishers, 2011.
- Bar-Asher, M., *Scripture and Exegesis in Early Imāmī Shiism*, Leiden, Boston, and Köln: Brill, 1999.
- Daftary, F., *A History of Shi‘i Islam*, London: I.B. Tauris Publishers, 2013.
- Hyder, S. A., *Reliving Karbala: Martyrdom in South Asian Memory*, Oxford and New York: Oxford University Press, 2006.
- Ibne Quluwayh, Abil Qasim Ja‘far bin Muḥammad bin Musa, *Kamiluz Ziyaraat: Merits and Method of Visiting Holy Tombs* (transl. Sayyid Athar Husain S. H. Rizvi), Mumbai: As-Serat Publications, 1431 [2010].
- Momen, M., *An Introduction to Shi‘i Islam*, New Haven and London: Yale University Press, 1985.
- Shekh Abbas Qommi, *Kunci-kunci Kehidupan Maknawi: Maḥāṭib al-Jinan* (transl. Shamsul Arif), Jakarta: Nur al-Huda, 2019.
- Vilozny, R., “Imāmī Records of Divine Sayings: Some Thoughts on al-Ḥurr al-Āmilī’s *al-Jawāhir al-saniyya fī-l-ahādīth al-qudsiyya*,” *Shii Studies Review* 3, 2019, 111–132.
- 菊地達也『イスラーム教：「異端」と「正統」の思想史』講談社選書メチエ，2009年。
- 中田考（監訳）『日亜対訳クルアーン』作品社，2014年。
- 平野貴大「現代シーア派学者によるムウタズィラ派採用論批判の考察：ハーメネイーのムフィード (d. 413/1022) 観に焦点をあてて」『一神教世界』10，2019年，99–119頁。
- 「編者ラディーとシーア派における『雄弁の道』の位置付け」佐野東生（編）『カーシアの説教：悪魔にいかに対処するか——カリフ・アリーの『雄弁の道』 Nahj al-Balāgha——』

龍谷大学国際社会文化研究所, 2021年, 27-31頁。

(日本学術振興会特別研究員 PD / Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science)